美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

9

2011 September/October

TAKE FREE

NO.7

特集

庄内ゆかりの美術館へ

庄内憧憬

西水美恵子

元世界銀行副総裁

Cradle 9 美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2011 September/October

平成23年9月1日発行（偶月奇数月発行）第2巻1号（通巻7号）

発行／Cradle編集局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市亀田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

ROC 庄内みかわ総合住宅展示場

庄内みかわ総合住宅展示場

山形県東田川郡三川町大字猪子字大堰端331番地8

【管理棟】㊐10:00～17:00 ㊡水曜日

ⓘ情報コーナー Ⓟ駐車場 🚻トイレ ♿キッズコーナー

◉自動販売機 ♨喫煙コーナー

Tel.0235-66-2003

URL www.mikawa-sjt.com

E-mail roc@mikawa-sjt.com

庄内みかわ総合住宅展示場 検索

最新情報はホームページでチェックしよう！

イメージキャラクター「みかワン」

毎週 土・日は新築相談日

来て、見て、当たる！ 抽選!! マンスリープレゼント!!

1棟見学で1回の応募チャンス! 6棟すべて見学すれば合計6回! 当選確率もその分UP! のうれしい大チャンスをお見逃し無く!!

9月のプレゼントは ホットプレートとコンロの一台二役の優れもの カセットコンロ

［期間］9月30日（金）まで

詳しくは、各展示場スタッフへお問い合わせください。

株式会社 ロック

本社／山形県鶴岡市大宝寺町3-51 tel.0235-23-9400／fax.0235-23-9134

不動産情報はコチラ! URL http://www.roc.co.jp/ E-mail info@roc.co.jp

歴史が醸し出すオーラの漂う場所

西水美恵子＝文

庄内を訪れる回を重ね、世のため人のためと動いた先人の夢に触れるつど、確と頷いている。

庄内のあちこちに、不思議な雰囲気が漂う所がある。傑出した人物に感じるカリスマに似ていて、まるで歴史が醸し出す息吹のようだ。ギリシャ語のアウラー（息）に由来するオーラという言葉が、よく似合う。

そのオーラを意識したのは一昨年の春、庄内空港に初めて降り立った瞬間だった。迎えの方が「庄内人の魂がこもる空港」と、教えてくれた。山海に包囲され「陸の孤島」とさえ呼ばれた地に住む人々にとって、空港は長年の夢。庄内人はその夢を現実にと自主的に動いたと。ひと昔前、ブータン王国初訪問の際にも、全く同じ体験をしていた。あの国の空港も、「ヒマラヤの秘境」に住む民が自ら叶えた夢だったと思い出して、確と頷いた。

庄内を訪れる回を重ね、世のため人のためと動いた先人の夢に触れるつど、確と頷いている。庄内藩校致道館では、清閑な佇まいが醸すオーラに圧倒され、第7代庄内藩主、酒井忠徳公に想いを馳せた。自主性を重んじよという現代でさえ希有な教育方針に驚き、それを命じた名君の、とてつもなく大きな夢を垣間見た気がした。

松ヶ岡開墾場のオーラにも、並外れた重量感があった。なぜか駆け足訪問はいけないと強く想うところがあって、今春ようやく機を得た。そのせいか、それとも早朝の月山山麓を渡る風のせいか、開墾場を東西にぬける並木道に一歩踏み入れて、鳥肌が立った。木造瓦葺3階建の大蚕室5棟が、葉桜の奥からその凛とした立ち姿を現し、語りかけてきた。

ゆるゆると大蚕室の間を抜けながら、開墾の歴史を顧みた。旧藩士が険しい原野の開墾に着手したのは、明治5年早春のこと。総勢3千人を超える大規模な開墾団隊組織とはいえ、60日を切る工期で323ヘクタールを竣工したと聞く。それから桑園を造成し、蚕室が完成したのは明治8年の春。同年夏には、養蚕と蚕種の製造出荷に成功した。原野から蚕種の輸出までわずか3年少々……。その驚異的な速度に改めて気づき、旧藩士と家族のご苦労や如何にと、胸がつまった。

松ヶ岡開墾場綱領その一、「徳義ヲ本トシ産業ヲ興シテ国家ニ報シ以テ天下ニ模範タラントス」。刀を鍬に持ち替えて未来を切り開いた先人を想いつつ、松ヶ岡本陣の小高い丘を登りきった。眼下に広がるこの地を慈しみ育ててきた人々のカリスマが結晶になって、朝日に輝いていると思ったら、涙だった。

訪問の最後を一人の若者が飾ってくれた。蚕室の一角に陣取る食事処「待カフェ」で、松岡物産社長、酒井忠順氏の夢に聞き入った。御馳走になった「絹麦きり」（絹タンパクを小麦に練り込んだオリジナル麺）にも、桑の実と絹の「松ヶ岡シルキードレッシング」にも、先人の偉業を受け止め未来へと繋ぐ、斬新希有なアイデアが詰まっていた。ふた品の美味に舌鼓を打ちながら、致道館の息吹を聞いた。忠徳公の大きな夢今ここにも稔ると、頷いた。

国指定史跡松ヶ岡開墾場 蚕室。
（鶴岡市羽黒町松ヶ岡）

にしみず・みえこ／大阪府豊中市生まれ。東北公益文科大学大学院客員教授。ソフィアバンク・パートナー。75年、ジョンズ・ホプキンス大学博士課程卒業。プリンストン大学経済学部助教授を経て、80年、世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁就任。03年退職以来、世界を舞台に様々なアドバイザー活動を続ける。米国首都ワシントンと英領バージン諸島在住。著書に『国をつくるという仕事』（英治出版）がある。

Special Edition

庄内ゆかりの美術館へ

あたたかく鮮やかな彩りに、心染まるこの季節。
今回は庄内のアートスポットへと出かけました。
ここでしか見ることのできない展示品や建築、お庭など、
あらゆるアートに包まれて、皆さんはどんな芸術と出会えるでしょうか。
さまざまなミュージアムの中から今回は、
庄内に生まれた偉大な芸術家の世界と、
この土地の文化の薫りただよう美術館・博物館を訪ねました。
アート鑑賞をしながら、
秋めく庄内をぶらり歩いてみませんか。

トビラ撮影協力＝金井整三郎美術収蔵館
取材・編集・撮影＝Cradle編集部

今井繁三郎美術収蔵館

羽黒町出身の洋画家、今井繁三郎さんは、生涯、芸術のビジョンを描き続けました。その表現は色あせることなく人々の心の奥へ語りかけています。

「他愛もない親子げんかもする父でしたが、絵に関しては次元が違っていました。画家としての頭の中を何度ものぞいてみたくなったものです」と木草さん。

迷い道のような畑地の奥へ分け入ると、ヤブツバキやヤマザクラなどの樹木が鬱蒼と茂り、ふと視界の先に白壁の土蔵が現れます。土蔵の周りには大きな甕や外国の魔よけ、シーサーなどが並び、どこか異国の地を訪れたかのような趣です。

この独特の存在感を放つ今井繁三郎美術収蔵館は、平成2年に当時80歳だった洋画家の故・今井繁三郎さんが開いた私設美術館。元禄2年に建てられた豪商の土蔵を鶴岡市山王町から移築し、美術館として活用。館内では今井さんの作品と、国内外で蒐集した美術工芸品を常設展示しています。

今井繁三郎さんは羽黒町に生まれ、戦前、東京を拠点に画業はもとより美術雑誌の編集など独自の芸術活動を展開していました。しかし昭和20年、空襲でアトリエを焼失、終戦後に故郷に疎開し、8900坪に及ぶ原野を開墾して自宅とアトリエを建て、新たな人生をスタートしました。「戦争で日本の文化が荒廃したことを父はとても憂いていました。失意の中、消えゆく文化を継承しなければという思いが常にあって、美術館を開く大きな夢を80歳にして描いたのだと思います」。そう語るのは、現在、美術館を管理している四女の齋藤木草さん。

今井さんは、中央画壇とは一線を劃し、個展を発表の場としていたため、生前、その画業は広く知られてはいませんでしたが、平成14年に91歳で亡くなるまで「子どもの描くような線と色遣い、発想がほしい」と、みずみずしい感性と好奇心を追い求め続けました。

「自由で先見的でグローバルな発想を持っていたと思います。その表現をすべて汲み取るのは難しいことですし、長く作品を見ている私でも見え方が毎日違います。『芸術に定義はない』と言った父の言葉どおり、見る方が自由に感じてもらえるように、館内の作品には題名を書いていません」。

館内のインテリアもすべて今井さんが手がけ、展示替えをする以外は空間のレイアウトも生前のまま。野趣あふれる庭の木々は今井さんが全国の旅先でもらった苗を植え育てたものだそうです。「『花咲くものはどれも生えるべくして生えたものだから取ってはいけないよ』と話してくれました。草花も館内のインテリアもすべてが父のアートですから、私が手を入れるのは最小限にとどめています」。

自由な発想の作風も、無造作に見える庭も、目や耳を澄ますと感じるものの多さに気づかされるこの場所。何度も訪れる人が多いのは、今井さんの自由な心に触れることで、自身の心が解き放たれるからなのかもしれません。この夏、初めて訪れたおばあさんが「絵のことは何も分からないけれど、良いものを見せてもらってありがとう」と何度もお礼を言って帰っていったそう。理屈や知識を持たず、心で見つめ、感じる時間がやさしく静かに過ぎていきます。

過去の企画展から「インド ミティラー展」「女の手仕事 甦る布地」。いずれも女性の手から生まれた芸術品。その土地の文化を映し出すような奥深さがあります。写真提供＝今井繁三郎美術収蔵館

誰もが時を選ばず芸術にふれることができる地元アート美術館。

概要

洋画家・今井繁三郎（1910～2002）の私設常設美術館として、平成2年5月に開館。建物は鶴岡市山王町の豪商、真島家本家の土蔵（元禄2年建立）を今井氏の住居敷地内に移築したもの。館内には油絵、水彩画、美術工芸品コレクションを常時70点余り展示。展示替えは年2回。野の花が咲く庭では四季折々の散策が楽しめる。

《白蛇》
今井繁三郎

《望郷》1999年
今井繁三郎

今井繁三郎 略歴

明治43年生まれ。昭和2年、芝絵画研究所入所。昭和11年より総合美術雑誌「美之国」の編集に携わる。昭和16年、従軍画家として南方へ赴く。昭和20年に帰郷。以降、日本の美術界再建に奔走。のち、地元白甕社ほか、長崎、広島などの他地方の文化活動にも尽力。昭和54年、斎藤茂吉文化賞受賞。平成2年、今井繁三郎美術収蔵館開館。平成8年、鶴岡市特別文化功績賞受賞。平成13年、鶴岡市名誉市民推戴。

アクセス

所 鶴岡市羽黒町仙道字一本松5-175
電 0235-62-3667
HP http://www.imaimuseum.net/
開 午前10時～午後5時
休 月曜日、冬期（12月～3月）
料 300円（維持管理協力金として）

相原久生＝取材・文
text by Aihara Kumi

土門拳記念館

酒田の豊かな自然に抱かれる土門拳記念館。土門の故郷で、彼が捉えた特別な瞬間と出逢う。それはこの地に生まれた才人、土門との出逢いでもあります。

「私の全作品を酒田市に寄贈したい」。昭和49年、酒田市名誉市民第一号となった土門拳。顕彰式での彼の一言は会場の人々を驚かせ、かつ感激させたといいます。

リアリズム写真の巨匠、土門拳が酒田を離れたのはわずか六歳の時。その後、『婦人画報』の企画で日枝神社の例大祭「酒田山王まつり」の撮影に訪れたのは昭和32年、まさに41年ぶりのことでした。しかしその撮影の傍ら、思い出の場所を訪ね、酒田の人々との交流を深める中で、あらためて故郷への愛着を深めていったといいます。

土門の意志を受けた酒田市は昭和55年、作品の収蔵展示のための酒田市土門拳記念館建設委員会を発足。市民をはじめ、全国の写真愛好家からの総額1億円を超える募金は大きな支援となり、開館に向けて大きく動き出しました。建築には土門と親交の深かった友人、世界的彫刻家のイサム・ノグチ氏や、グラフィックデザイナーの亀倉雄策氏、草月流初代家元・勅使河原蒼風氏の令息、三代家元の宏氏らが「土門のためなら」と、設計の参画に協力を惜しまなかったといいます。

「この記念館は土門を愛してやまない人々の思いが結集して生まれたものです。だからこそ、開館当初の雰囲気、空間の世界観を生かした展示に努めています」と語るのは、記念館職員の大竹佳代子さん。

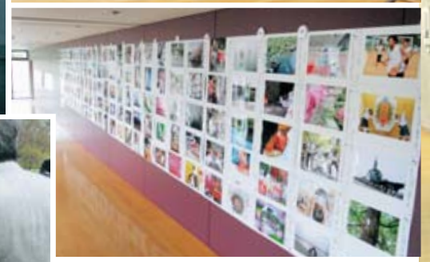
入口の重厚な扉を開けると、ほの暗い廊下の先に広がる主要展示室と企画展示室Ⅰ。ここは太陽光が全く入らない設計のため、時を忘れてしまうほどに作品との対峙が許された空間です。ギャラリーへと歩みを進めるにつれ中庭から少しずつさしこむ柔らかな光が、写真との対峙で張りつめていた緊張感を和らげ、鳥海山を望む解放感あふれる記念室へと誘います。そして、土門への新たな思いを胸に、企画展示室Ⅱでもうひとつの対話が始まるのです。

記念館では代表作「古寺巡礼」をメインに、定期的にテーマを変えながら展示替えを行っています。また、毎日新聞社主催「土門拳賞」、アマチュアを対象とした「酒田市土門拳文化賞」受賞作品展も毎年開催、市民公募による「わたしのこの一枚展」は今年で6回目を迎えます。

子どもたちや若い世代の方々にも、気軽に足を運んでほしいと話す大竹さん。

「土門の写真は被写体との間に生まれた特別な瞬間。頭で理解しようとするのではなく、感じるだけでいいのです。また、土門が執筆した絵やエッセイからは、東北人らしい粘り強さや情に厚い人間らしい魅力にふれることができます」。

鬼才と称された写真家の生涯を優しく受け入れるように、故郷の美しい自然に抱かれた土門拳記念館。不変の中に特別な一瞬を見出した土門のように、この記念館もまた、いつまでも色褪せることのない感動の場であり続けることでしょう。



ミュージアムコンサートや「わたしのこの一枚展」は近年の人気企画。毎年5月の「拳ちゃんこどもまつり」は、子ども好きな土門拳が母から「拳ちゃん」と呼ばれていたことに由来。写真家・藤森武氏ら土門の弟子によるちびっこ写真教室も好評です。写真提供＝土門拳記念館

「土門の写真は被写体との対峙から生まれる特別な瞬間。構えず、心で感じるままに受けとめてほしいですね」と大竹さん。

飯森山の豊かな自然と、土門を慕う友たちの思いに彩られた土門拳記念館。

概要

昭和58年10月1日、リアリズム写真の大家、土門拳の全作品約7万点を収蔵、保存、公開する日本初の写真美術館、世界唯一の個人写真記念館として開館。谷口吉生氏による設計は吉田五十八賞、芸術院賞、JIA25年賞など建築界でも名だたる賞歴を誇る。2009年にはミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで二つ星評価を獲得。

神護寺金堂薬師如来立像頭部

これからの展示案内

- ～9/28「古寺巡礼ー土門拳仏像十選ー」「ヒロシマ」
- 9/12～11/13「文楽」
- 10/1～10/23「わたしのこの一枚展」
- 10/1～12/25「古寺巡礼ー西日本編ー」「筑豊のこどもたち」
- 11/14～12/25「古窯遍歴」

イベント

- 10/1 開館記念日無料開放
- 10/8 ミュージアムコンサート アンサンブル桜ヶ丘（オカリナ）

アクセス

所 酒田市飯森山2-13（飯森山公園内）
電 0234-31-0028
HP http://www.domonken-kinenkan.jp/
開 午前9時～午後4時30分
休 4～11月無休（9/29・30、12/26～28展示替えのため臨時休館）、12～3月毎週月曜（祝日の場合は翌日休館）、年末年始（12/29～1/3）
料 一般420円、学生210円 小中学生100円（小中学生は土日無料）※団体料金別途

土門かおり＝取材・文
text by Domon Kaori

本間美術館

豊かな風土に培われた歴史と文化、公益の精神を礎に、人々と歩み続けた本間美術館。いつの時代も、故郷を語らう場所として親しまれています。

美しく茂る木々を背に、堂々とした中に落ち着いた佇まいを見せる本間美術館。敷地内に入れば、街の喧騒を忘れてしまうほど時はゆるやかに流れていきます。

本館と庭園は文化10年、本間家四代光道が、船荷の積み下ろしを手伝う丁持の冬季失業対策事業として築造した別荘です。大正14年の東宮殿下（昭和帝）行啓以降、京風の精緻な木造建築の別荘本館「清遠閣（せいえんかく）」は、酒田の迎賓館としての役割を果たし、鳥海山を借景に蓬莱石組を中心とした池泉回遊式庭園「鶴舞園（かくぶえん）」は日本の美意識が凝縮された空間として、人々に愛されてきました。

その本館と庭園を本間美術館として開館したのは、昭和22年5月のこと。敗戦後の混乱で、日々の営みもままならなかった時代の中での開館でした。

二代目館長、本間祐介氏が日本経済新聞に寄稿した「本間美術館の二十年」には、先人たちが遺した優れた美術品を活用し展示することで、敗戦で荒廃した人々の心の励みとし、日本人としての誇りを取り戻してほしい。そして日本の芸術文化を活性化させていきたいという強い意志があったことが記されています。

酒田という地域そのものにも美術館創設の素地があったと語るのは、館長の田中章夫さん。「本間家が培ってきた公益の精神が地域に広まっていたことも、開館への大きな力となったでしょう。この街は、豊かな風土性に、北前船の往来で繁栄した湊町としての要素が加わって、多様性に富んだ文化が形成されました。そこに酒田人気質といわれる進取の気風が相まって、美術館創設に多くの人々が共鳴したのでしょうね」。

美術館では開館以降、本間家ゆかりの美術品に加え、古美術から近・現代美術の紹介に務めてきました。開館翌年に初開催した「雛祭ひな人形展」は行列ができるほどに賑わい、現在は「雛祭古典人形展」の名で受け継がれ、毎春恒例の企画展として親しまれています。

「本間家に受け継がれてきた地域貢献という理念をひとつの柱として成り立ってきた美術館だからこそ、酒田独自の文化と伝統を後世にきちんと伝えていかなければならないと考えています。感受性の豊かな子どもたちの故郷、文化との出会いの場であり続けたいですね」。市民の意見を取り入れながら美術館を盛り上げていきたい、と田中館長は期待を込めます。

学芸員の阿部誠司さんは、お父様がよく訪れていたことからこの美術館への思い入れもひとしおのよう。「庭園の緑の木立に囲まれているだけで不思議と心が落ち着きます。日本の美を身近に感じられる癒しの空間があるのも魅力ですね」。

酒田の文化の担い手として人々の心を潤してきた本間美術館。創設時のように、市民とともに歩み続けていくことで、また新たな可能性が広がりそうです。

田中館長は小さい頃、この庭園で木登りをして遊んでいたそう。
「次代を担う子どもたちにこそ、この場所で故郷の歴史と文化を身近に感じてもらいたいですね」。

本館

過去のワークショップから（右上から時計回りに）
「酒田の人々が親しんでいるものを描く」（講師：日本画家・伊藤彭耳氏）、「墨で描く連画♪」、「岩絵の具で石ころに色をつけてみよう」
写真提供＝本間美術館

地域貢献を理念に、戦後の人々の心を潤した誇り高き美術館。

概要

戦後の荒廃する人々の心を励まし、芸術文化の向上を目的として昭和22年に開館。本館「清遠閣」と庭園「鶴舞園」は文化10年、本間家四代光道により丁持の冬季失業対策事業として築造された別荘。昭和43年には新館が開館。本間家ゆかりの美術品から近代美術まで、幅広い企画展示で地域文化の育成と発展を担う。

「享保雛」

円山応挙「鼬図」（県指定文化財）

これからの企画展・常設展

- ～9/20「俳諧資料と江戸の絵画」
- 9/1～27「南宋から明治まで 僧侶の書と絵画」
- 9/21～12/19「日本の焼もの」
- 9/29～10/25「雪・月・花の美」
- 10/28～11/23「大正・昭和の庄内の景色 太田義一日本画展」
- 11/25～12/19「銅版画展―エッチングの世界―」

アクセス

所 酒田市御成町7-7
電 0234-24-4311
HP http://www.homma-museum.or.jp/
開 午前9時～午後5時
（11～3月は午後4時30分まで）
※入館は閉館30分前まで
休 火、水曜日（12～2月）
年末年始（12/20～1/7）、展示替え日
料 大人900円、学生400円
小中学生無料　※団体料金別途

土門かおり＝取材・文
text by Domon Kaori

致道博物館

庄内人の歩みを未来へと伝え、継承する致道博物館。その膨大な歴史資料には先人から今を生きる私たちへのメッセージが込められています。

「先人が残してくれたものを展示し継承することで、その生活の知恵を次代に伝える。それが博物館の大きな役割です。先人の歩みがあったからこそ今があり、今があるから未来への展望が開ける。過去と現在を継承しながら、次のステップへ常に進んでいきたいと思っています」。致道博物館館長で、庄内藩主酒井家第18代当主の酒井忠久さんは、この博物館の存在意義についてこう語ります。

博物館の敷地は鶴ケ岡城の三の丸にあたり、かつて庄内藩主酒井家の御用屋敷があった場所。忠久さんの祖父である16代目忠良さんが昭和25年に、建物や土地、伝来の文化財を寄付して、財団法人以文会を設立したのが始まりです。

敷地内には、大名屋敷の面影をしのぶ「御隠殿」と国指定名勝「酒井氏庭園」があり、さらに、田麦俣の多層民家「旧渋谷家住宅」「旧西田川郡役所」「旧鶴岡警察署庁舎」が移築され、いずれも国の重要文化財に指定されています。

郷土の文化、学問を尊ぶ気風を育んだ「藩校致道館」の精神を受け継ぐこちらでは、庄内の考古、民俗資料の収集と保存に力を注ぎ、舟運や海運、農業に関する資料のほか、生活文化コレクション（木造酒器、くりもの、仕事着ほか）など8種5350点の重要有形民俗文化財を所蔵しています。それらの常設展示に加え、地域の芸術文化の向上を目的としたさまざまな企画展を通年で開催。著名な作家や新鋭アーティストを招いての個展や、日本美術刀剣保存協会が国内2ヵ所を巡回する刀剣の展覧会を毎年シリーズ化するなど、この場を拠点に、作家、研究機関、他施設などとの交流が活発に行われています。また、平成7年に始まった酒井家所蔵のお雛さまの公開は、いまや全国から多くの観光客が訪れる「鶴岡雛物語」へと発展しました。

さらには致道館の教育方法を引き継ぎ、子どもから大人までを対象にした論語の素読教室を開館当初から毎年行っています。親子3代が門下生というご家庭も多く、市民との関わりの深さがうかがい知れます。

ひとつの館にこれほどの建造物と膨大な民具や農具類を残すことができたのは、7千人に及ぶ友の会の会員や大勢の人たちの協力があったからだと言います。

「人々の暮らしや思い、大切にしてきたあらゆるものを、守り、分かりやすく伝えるのが博物館。誰かが残さなければ消えてしまうものを文化財として残してきた庄内人はすばらしいですね」長く常務理事を務めてきた奥様の天美さんは、ご長男の忠順さんへその職を引き継ぐにあたって、そう話してくださいました。

元和9年、3代忠勝公の入部以来、庶民と歩みをともにしてきた酒井家を柱に、郷土を愛する心がつくり上げた博物館。日本人の生き方が問われている今だからこそ訪れたい場所です。

明治期の擬洋風建築が美しい「旧西田川郡役所」前にて、酒井忠久館長と奥様の天美さん、常務理事に就任したご長男の忠順さんと。

古典素読教室や夜の博物館探検など、子どもたちが参加できるイベントも多数実施。毎年恒例の名刀展では刀匠が銘切などの実演を披露。
写真提供＝致道博物館

庄内の考古・民俗学の研究センター機能も備えた生活史を語る博物館。

概要

鶴ヶ岡城（現在の鶴岡公園）に建つ庄内唯一の博物館。昭和25年に財団法人以文会が発足し、昭和32年に（財）致道博物館となる。名称は庄内藩校致道館に由来。庄内地域の民具や農具などの民俗資料をはじめ、重要有形民俗文化財8種5,350点を収蔵展示するほか、歴史的建造物も移築、保存している。

上：「太刀銘実光」（国宝）
下：「太刀銘信房作」（国宝）

多層民家（湯殿山麓田麦俣地区より移築）

これからの企画展・常設展

- 9/1～29 遠藤賢「洋画自選」展
- 10/1～26「日本画のたのしみ―富岡鉄斎・竹内栖鳳など―」
- 10/28～11/3 第6回 美を謳う艸展
- 11/5～29 津軽こぎん刺しと南部菱刺し
- 12/1～9 第32回鶴岡書道会会員展
- 12/11～1/19 墨画の世界―江戸時代、代、奇人伝の一人　石井子龍―

アクセス

所 鶴岡市家中新町10-18
電 0235-22-1199
HP http://www7.ocn.ne.jp/~chido/
開 午前9時30分～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休 年末年始、12～2月は毎週水曜日
料 一般700円、学生380円
小中学生280円　※団体料金別途

相原久生＝取材・文
text by Aihara Kumi

庄内写真季行 5 大山 上池・下池

早朝、餌を求めて庄内平野に飛び立つコハクチョウは、大山の風物詩である。

ラムサール条約の指定地、鶴岡市大山「上池・下池」は、ハスが咲き、数多くの水鳥たちが集結する。両池の八森山と高館山には、今では貴重なブナ林が現存し、四季の変化をみせる。

秋たけなわ、紅葉に包まれたブナ林の上空を、北国から渡って来たコハクチョウが旋回する。朝早く餌を求めて、次から次へと庄内平野に飛んで行く姿は、大山の風物詩である。

写真・文＝
太田威（鶴岡市・大山在住）
「紅葉とコハクチョウ」